



Title	SCT® (Systems-Centered Therapy / Training /Approach) の考え方とその実践の特徴 : 理論の記述と実際のグループの検討を通じて [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	鴨澤, あかね
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14854号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/85231">https://hdl.handle.net/2115/85231</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Akane_Kamozawa_review.pdf, 審査の要旨



## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：鴨澤あかね

審査委員	主査	准教授	渡邊 誠
	副査	教授	松田 康子
	副査	教授	岡島 美朗（自治医科大学）
	副査	客員研究員	嶋田 博之（慶應義塾大学）

## 学位論文題名

SCT®（Systems-Centered Therapy / Training / Approach）の考え方とその実践の特徴

— 理論の記述と実際のグループの検討を通じて —

医療、福祉、教育等の領域で用いられてきた集団精神療法の領域においては、集団全体あるいは個々の参加者の間に、心理力動と呼ばれる心理学的な力が働き、そこに注目して集団を運営することで、心理療法としての効果が高められるとする考え方が、概念と実践に関する主要な基盤の一つとなってきた。しかし心理力動を扱う技法に関して、基盤となる理論や介入技法が高度に系統立てて述べられているものはあまり見当たらない。技法は半ばアートであるとする見方もあり、実施者による差が大きいのが現実である。そういった中で本研究は、SCT（Systems-Centered Therapy/Training/ Approach）という、リビング・ヒューマン・システム理論（A theory of living human systems）に基づいて生み出された技法に着目した。SCTはその理論的基盤の体系性が高く、介入技法も理論に基づいた明瞭なものであり、基本的には誰が行っても同様の効果が得られ、かつ安全性の高い方法として考えられている。SCTでは集団の発達を念頭に置きつつ、機能的サブグループ（functional subgrouping）と呼ばれる参加者相互の共通点を共有し、相互の差異を扱う際には集団全体にその準備が出来ていることを確認してから行うという強力な介入技法を用いる。これは集団の力が持つ負の側面がリーダーに向かう構造をつくり出すことで、集団全体の安全性を保ち、各成員の共通点と差異を各自が統合することを可能とする特徴を持つ。その上で、「いま、ここで」の体験を探索することで、新たな体験と洞察を可能にする場を提供しようとする。本研究では、実際のSCTの実践における特徴を、ビデオ録画を撮り逐語記録を質的研究手法により検討するという、従来の集団精神療法研究ではあまり行われて来なかった客観性の高い方法に基づき検討を試みた。また、集団参加の途中辞退という失敗例とも取れる事例に関して、客観的なデータに基づいて丁寧に検討が行われていることも特徴である。本研究の構成は、序章に始まり第1章：SCT理論の記述、第2章：大学生を対象として実験的に施行された心理力動的集団精神療法とSCTの比較検討、第3章：癌経験者に対して行われたSCTの実際と効果の検討、および終章となっている。

本研究において得られた知見には以下のようなものがある。

まず全体的な点としては、①SCTが理論的に想定している仮説が、実現可能であることを実証的デー

タに基づいて示したこと、②集団精神療法において、体系立った理論と明瞭な介入技法により仮説通りの効果が一定程度得られることを実証的に示したことで、心理療法家の専門性を客観的に保証する可能性の一つを提示したこと、である。

二つ目に、SCT 理論の効果、実施上の留意点、修正に関する知見として、①機能的サブグループの方法を習得するための労力と心理的負担は、参加者間の関係にプラスの心理的效果をもたらしている面があること、②「今、ここで」について語ることを促し続ける手法は、参加者に心理的負担を与えており、日常的な防衛的態度の一定程度の容認等が有効であることの示唆、③SCT において「社会的なステレオタイプ」として否定的に捉えられているものでも、「癌体験者」のような個人の生き方に大きな影響を与える特徴は、結びつきや一体感を生み出すこと、④機能的サブグループという安全とされる技法を用いても、実際に安全であるかどうかの判断は容易ではないと示したこと、があげられる。

三つ目に、SCT 実施の背景要因となっている、日本と欧米との文化差に関連する知見として、①表現することを良しとする欧米文化を背景とした SCT を、相手の気持ちを察することに価値を置く日本文化の中で実践しようとする場合、文化差を配慮すべきであること、を示唆している。

四つ目に癌体験者の心理的支援に関して、①「今、ここで」の体験表出の促進により深い感情表現が生じることから、SCT が有効な援助技法たり得る可能性を提示した。

一方、本研究の限界としては以下の問題が挙げられる。研究対象とした集団が、①実施回数、時間数、集団の数において少なく、十分な検証のためにはさらにデータが必要であること、②いずれも集団の発達段階の初期であり、本研究の検討が集団の初期段階の現象に限定されていること、そして、③関連する領域における先行研究との比較検討が望ましいこと、である。

以上のような評価点、課題に加えて、審査委員会では、研究を目的とした集団精神療法施行のデザインをより妥当で精緻なものにすること、データから何が示されたの判断に関しての問題点等が指摘された。しかし、本研究の示した客観性の高いデータに基づく実証的な検討の試みは、集団精神療法、心理療法領域における研究の現状に照らして高く評価すべきものと思われ、前述したように当該領域に新たな知見と示唆を与えるものと考えられた。以上をもって審査委員会は、著者が北海道大学博士（教育学）を授与される資格があると判断した。